

殺人鬼メアリー

フリッカ・ウィスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

殺人鬼異変が終幕してから数日間、主犯者メアリーが姿を眩ました
人里で偶然メアリーを見つけたフリッカであつたが…

目 次

1話	忘却	1
2話	邂逅	6
3話	傭兵部隊	10
4話	全てが狂い始めた日	14
5話	良心の呵責	19
6話	同族嫌悪	24
7話	食人鬼ルーミア	29
8話	同業者	33
9話	抑止力	38
10話	紅魔館	43
11話	永遠に幼き紅い月	48
12話	悪夢の日覚め	54
13話	殺人鬼V S 食人鬼	59
最終話	友に遺す物	63

1話 忘却

魔法の森のはずれにある峠

メアリー戦後、フリツカ達が八雲家へ行つた後
メアリー「…あの女の人に、情け…かけられちゃつた…わね。せつ
かく…お母さんの所に行けると…思つたのに…」

その時、メアリーの脚から力が抜けた

メアリー「ハハハ…どつちにせよ…この傷じやもうそろそろ死ぬか
…」

そうメアリーが呟いていると、八雲家の方が光つているのが見えた
メアリー「ん? 何か…あつちで光つてるわね。つて、こつちに近付
いて来てる! ?」

その光を傷負いのメアリーが避けれるはずもなく、吹き飛ばされて
しまつた

妖怪の山

梶「さてと、今日の警備も終わつたし、家に帰りましようかね。?:
ん?」

梶は自宅への帰り道の途中に何かを見つけた

梶「あれは…人? まさか登山でもして遭難したんでしょうか…」
そう思い近づいてみると、その人は血塗れになつていて、腹も切り
裂かれていることが分かつた

梶「!? 大丈夫ですか! ? 何かに襲われたんですか! ?」

メアリー「コヒュー…コヒュー」

梶はその人間が僅かながら息をしていることを確認できたが、この
息の音は肺に穴が開いている可能性があつた

梶「(と、とにかく、一旦私の家に運んで手当しないと!)」

梶はそう思い、メアリーを担いで自分の家に走つた

梶の家

メアリー「…うつ…ここ…何処?」

梶「ああ、ようやく気が付いたんですね。数日間起きないからもう
ダメかと思いましたよ」

メアリー「貴女誰ですか？」と言うか、ここは何処なんですか？」

榊「ああ、そんなに警戒しないでください。私は榊、ここは私の家です」

メアリー「何で私はこんな所に…」

榊「何でかは知りませんが、山で大怪我をしていたようですよ？お腹も熊か何かに引き裂かれたような傷がありましたし。とりあえず、止血だけでもと思って勝手に連れてきたんですよ」

メアリー「そうだつたんですか…ありがとうございます」

榊「それで、何があつたんですか？」

メアリー「…何で怪我をしたのかも山に登った記憶もないんですね」

思ひ返そうとしたが、ベルさんと別れた後からの記憶を思い出そうすると頭がズキズキと痛み、思い出せない

榊「そう…ですか。まあとりあえず、体が大丈夫なようなら麓まで案内しますよ？」

メアリー「何から何まで、ありがとうございます。じゃあお願ひします」

榊「いえいえ、じゃあ行きましょうか」

そう言つて二人は山を下つていった

妖怪の山 麓

榊「ここを真っ直ぐ進めば人里に着きますよ」

メアリー「ありがとうございます」

榊「それでは、お気をつけて」

そう言つて榊は妖怪の山に帰つていった

メアリー「(とりあえず、何か手掛けりがあるかもしねいし、私の事を知つてる人を探さないといけないわね)」

人里

メアリー「どなたか、私の事を知つてる人はいますか？」

メアリーはそのように人里で聞いて回つた。すると…

老婆「あれ？あんた確か前に回覧板で回ってきてた似顔絵の…」

老婆がそう咳き、懷から何か紙を取り出した

老婆「…やつぱりだ！あんたこの紙の人物じや！」

老婆がそう叫ぶと、周りの住民が集まってきた

メアリー「え？なんか私ここで有名人なんですか？」

急に人が集まってきて注目されたことにより、メアリーは少し照れてしまう

しかし、それはメアリーの大きな勘違いであった

男性「ああこいつだ！間違いねえ！」

メアリー「あの、私何でそんなに有名になってるんですか？」

男性「何で…だって？…こいつ、自分のやつた事を理解してねえぞ！」

メアリー「え？まさか、私何か悪い事をして指名手配されてるんですか？」

女性「あんたは…私の母や喜助さんを殺した…殺人鬼だよ！」

メアリー「え？…何…それ…」

老婆「こ、こやつ…泣いておるぞ」

男性「嘘泣きに決まつてんだろ！殺人鬼が罪を悔いるかよ！」

メアリー「嘘だ…そんな…わけ…」

メアリーは何故か無意識に体がその場から逃げていた

男「あつ！おい！逃げるな！」

人里 人気のない裏道

メアリー「ハア…ハア…そんなの…嘘…だよね？」

メアリーがそんな事を呟いていると、声をかけられた

フリツカ「貴女…メアリー？あんた今までどこ行つてたのよ！」

メアリー「私の名前…知つてるの？」

フリツカ「はあ？当たり前でしょ？」

メアリー「私は人を殺したの！嘘よね！嘘なのよね！」

フリツカ「…まさか、今までの記憶がないの？」

メアリー「うん…でも、その反応つて事は私は誰かを殺したのね…」

フリツカ「…ちょっとついて来て」

そう言つてフリツカはメアリーの手を引き人目につかぬようにとある場所に向かつた

博麗神社

フリツカ「靈夢、ちょっと話があるんだけど」

靈夢「あら、フリツカいらっしやい。話つて何?」

フリツカ「今日つてさとりさんが来てる予定だつたよね?」

靈夢「ええそうだけど?今は縁側に居ると思うわ」

フリツカ「そう、ありがとう」

そう言つてフリツカはメアリーを連れて縁側に向かつた

靈夢「あれ?今フリツカが連れて行つた子つてどこかで見た気が

⋮」

博麗神社 縁側

さとり「ふう…地上でひなたぼっこもなかなかに良いものねー」

そんな独り言を言つている小五口…さとりのもとにフリツカ達が

やつてきた

フリツカ「さとりさん、お久しぶりです」

さとり「あら、フリツカさん、ご無沙汰してます。私に何か…ああ、

そういう事ですか」

フリツカが用件を言う前に言いたい事をを察したさとりはメアリーに意識を集中した

さとり「…ええ、確かにこの方は記憶を失つているようですね。ベルさん?とかいう人の場所から去つた後位から記憶が曖昧になつて読み取れなくなっていますよ」

メアリー「何でベルさんの事知つてるんですか?」

さとり「何でつて…貴女の記憶から読み取つたんですよ。私覚妖怪ですしど…」

メアリー「妖怪?そんな現実性のない話あるわけ…」

さとり「そんなこと言われても私が妖怪なのは事実ですし…」

その後、浮遊したりしてようやくメアリーはさとりが妖怪だという事を理解し、ついでにここが幻想郷という所だという事も教えた

メアリー「それで、私は記憶がない間にこつちで何をしてたの?フリツカだつけ?は知つてるんでしょ?」

フリツカ「…貴女は、人を殺したの。それも数十人単位でね」

メアリー「…やつぱり、そうなのね。ありがとう、あと、ここにはもう来ないわ。貴女やさつきの巫女さんに迷惑かかるだろうし」

そう言つてメアリーは帰つていった
さとり「あの人、お燐から聞いてる話と別人ですね」
フリツカ「ええ、ほんとに同じ人物なのか疑うレベルですよ」
さとり「もしかして、現世に居た時に何かがあつて、それで殺人鬼
になつてしまつたのかもしれませんね」

To Be Continued

2話 邂逅

魔法の森

メアリー「私はこっちの世界で殺人を犯してたようだけど、全然覚えてない…」

そんな事を呟きながら森の中を歩いているメアリー
メアリー「…もう、なるようになれって感じね。ベルさんに言われてた実戦修行でもしようかな？相手はそこら辺の妖怪でいいとして…あつ、ちようといいのがいたわ」

そう言つて見つけた妖怪に近づいていく

メアリー「ちよつとお願ひがあるんだけど」
ルーミア「え？ 私に何か用なのかー？」

振り返ったルーミアの顔を見てメアリーは驚いた
しかし、それはルーミアも同じ事だった
二人「私がもう一人いる（のだー）！？」

二人共ほぼ同時に驚いたが、すぐに冷静になつた
メアリー「いや、ただ似てるだけか」

ルーミア「えっと、何の用なのだー？」

メアリー「私の実践訓練に付き合つて欲しいのよ」

ルーミア「それ、私は何の得もないのだー」

メアリー「んー、じやあ私に勝つたら、私のことを食べてもいいわ
よ。あなた妖怪でしょ？」

ルーミア「!?:のつたのだー。後で助けてとか言つても知らないの
だー！」

メアリー「ええ、交渉成立ね」

そう言つて少し二人の間を作つた直後、ルーミアが人外なスピード
で跳んできた

だが、見えないほどでもないルーミアの攻撃はたやすく避けられて
しまつた

ルーミア「なかなかやるじゃないかー」

メアリー「貴女も、なかなか素早い攻撃じゃない。次はこっちから

よ

そう言つてメアリーはナイフを取り出して、ルーミアの遙か頭上に投げた

ルーミア「え？どこを狙つてるのだー？」

ルーミアは不思議に思つたが、すぐにその意味が分かつた

メアリーがナイフを投げた直後、ルーミアに大量の落ち葉が降つてきて、視界を遮つた

ルーミア「くつ！邪魔なのだー！」

ルーミアが落ち葉に気を取られている隙にメアリーはルーミアの後ろに回り込んでもう一つ取り出していたナイフでルーミアを拘束していた

メアリー「チエツク：メイトね」

ルーミア「…負けたのだー…」

だが、メアリーはルーミアが負けを認めると、すぐに拘束を解いた

ルーミア「…どういうつもりなのだー？」

メアリー「ん？何がかしら？」

ルーミア「何故拘束を解いたのかと聞いているのだー！」

メアリー「え？だつて、貴女はもう負けを認めたでしょ？なら、それ以上攻撃も拘束もする必要性ないじやない」

ルーミア「それでも、私はお前を食べようとしたんだぞー？」

メアリー「いやいや、さつき約束したじゃない実戦訓練に『付き合つて』、戦いに勝てたら『私を食べてもいい』って、お互いそれで納得したし、実戦訓練は十分できたんだからそれ以上のことをする気はないわ」

ルーミア「…変な奴なのだー」

メアリー「フフツ、よく言われるわ。それじゃ、私はもう行くわね。手伝つてくれてありがとう」

ルーミア「待つのだー！妖怪として恥をかかせた罰として、名前を聞かせるのだー！」

メアリー「あら、それは失礼したわ。私はメアリー、メアリー・フォードよ」

ルーミア「私はルーミアなのだー」

メアリー「そう、分かったわルーミア、それじゃまたね」

ルーミア「次は負けないのだー！」

そう言つて二人は別れた

迷いの竹林

メアリー「さてと…建材は竹とか木が手頃なのがしらねえ…家とか作つたことないから全くわかんないけど…」

その時メアリーは、竹藪の向こうを誰かが通つたのを見つけた
メアリー「（あ、今誰か通つたわよね。今の人聞いてみようかしら）」

そう言つてメアリーはその者?に近付いて行つた
すると、近づくにつれその者は獣のような耳が生えていることに気が付いた

メアリー「（あれはケモ耳?っていう事は、妖怪なのかしら?まあいいけど）」

一瞬他をあたろうかとも思つたが、人通りが少ない事にはメアリーも気付いていた為、その者に聞くことにした

メアリー「あのー、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

影狼「え、私?何?かしら?…」

メアリー「?…どうかしたんですか?」

影狼「メア…リー?」

メアリー「!?私の事を知つてるんですか?まさか、貴女の家族か知り合いにもなにか…」

影狼「今度は記憶喪失を装つてるの!?騙されない!私は騙されないわよ!」

影狼は異常なまでに怯えていた

メアリー「ほ、本当なんです!何も覚えてないんです!」

影狼「じゃあ教えてあげるわ!あんたは現世で私を生きたまま解剖して笑つてたキチガイよ!」

メアリー「え?…」

メアリーは勘違いをしていた

フリツカ達から話を聞いた時、自分はただの殺人鬼だったのだと思っていた。しかし、今日の前に居る妖怪の話が本当ならば、自分は快樂殺人を犯してきたイカレた女という事になる

そう考えた瞬間、足の力が抜けて、その場にへたり込んでしまったメアリー「生きたまま…解剖？そんな非人道的な事を私は…嬉々としてやつていたというの？」

メアリーはそんな事を呟きながらゆっくりと立ち上がり立った

影狼「な、何!? 私とやろうつていうの!? 言つとくけど、あの時みたいに簡単にはやられたりはしないわよ!」

影狼は半狂乱になっていたが、メアリーが向かってくることはなかつた

メアリー「何も思い出せないですけど、貴女の言動から察するに本当の事なんですよね？すみません、私は消えますね…」

そう言い残し、フラフラとどこかへ消えて行つた

メアリーが立ち去つた事で安心したのか、影狼もその場にへたり込んだ

影狼「た、助かったあ…またバラされるかと思つた…」

To Be Continued

3話 傭兵部隊

玄武の沢

メアリー「さつきの妖怪、すつぐく怯えてた…記憶がないとは言つても、私つて最悪な奴ね…」

自分を毒づきながら人気のない道を歩いていると、いつの間にか知らない所に居た

メアリー「（ハア…）これからどうしよう…ほどぼりが冷めるまでサバイバルって言うのもありだけど、人里の雰囲気から見て何年も人前に出れそうにないわね…」

そんな風に思つていると

男「ねえねえそこのお嬢ちゃん」

メアリー「え？ わ、私ですか？（まさか、私の首を狙つてる人？）

男「そんなに警戒しないでよ。ちょっとお手伝いして欲しい事があるだけだからさ」

メアリー「お手伝い？ いいですけど…（まあ、ベルさんに鍛えられてるから物運ぶくらいならしてもいいけど…）

男「ありがとう！ ジャあ早速…この刀の切れ味を試させて♪」

メアリー「っ！（この人、辻斬り！？）

メアリーの考えがまとまりきる前に男は斬りかかってきた。だがそれは素人のそれであり、メアリーにとつて脅威ではなかった

男「おいおい、避けたら切れ味が確かめられないだろ？」

メアリー「そんな太刀筋じや、一生かかつてもあたらないわよ」

男「ほほう、威勢がいいね」

メアリー「それに、私もナイフ持ちなんだけど？（贝尔さんには自衛でのみ使つていいって言われてたし、使つていいよね？）

メアリーの方も刃物持ちという事実は相手も意外だつたようで、少しメアリーから距離をとつた

男「これは意外だな。最近の女の子は自衛用のナイフを持つてゐるのか。ただ、それで何ができるつて言うんだい？僕に勝てると思つてるの？」

メアリー「あまりなめないでもらいたいわね。これでもそこいらのゴロツキよりは強いわよ」

男「へっ！ そうかい！」

そう言つて再び襲いかかつてくる男

メアリー「…遅いわね」

男の一太刀を軽く避け、ナイフを滑らすようにして男の体を斬り込む

男「なっ！ ゲホッ…」

メアリー「これで分かったでしょ？ ここでのことは誰にも言わないであげるから帰りなさい！」

メアリーはそう言つたが、男の返答がない

メアリー「…あれ？ …!? 死んでる⁈」

メアリーは氣付いてないが、今の体は子供の様に見えているだけで、力は青年期と同じなので、力が有り余っているのだ。そんな状態で力がない事が前提の斬技をやろうものなら大惨事になるのは必然である

メアリー「（どうしよう…完全に加減間違つて殺っちゃつた！）

メアリー自身は何度か人を殺めているとはいえ、記憶上は初の殺人であり、慌てふためいてしまう

しかし、今の状況に不思議と既視感を感じるメアリー

メアリー「あれ？ この感じ、どこかで見たような…」

ズキッと頭が痛む

メアリー「何か、思い出せそうなんだけど、何だつけ？」

次第に鼓動が激しくなつてくる

そしてついに

メアリー「…！ 思い出した！ たしかあの時、私は初めて人を殺めたんだ！」

ベルさんとの決別後

荒野

メアリー「この周辺で傭兵組織が組まれてるって聞いたんだけど

⋮

傭兵「お嬢ちゃん、そこで何やつてるんだい？ここは傭兵達の訓練場だから危ないよ？」

メアリー「あの、私は入隊希望者です」

傭兵「え？いやいや、傭兵はあそびじゃないんだよ？」

メアリー「それくらい承知します」

その傭兵はメアリーにただならぬものを感じた

傭兵「…まあいいけど、採用試験で落ちると思うよ？」

そう言つて二人は隊長のところへ行つた

男女移動中……

傭兵「ボス、入隊希望者を連れてきました」

ボス「そうか、ご苦労…だつた…な？」

メアリーを見た瞬間ボスが固まつた

ボス「…ハワードよ、いくらうちの隊に女が少ないからつて、こんな小さな子供を連れて来ちゃいかんだろう…」

傭兵「ち、違います！この子が入隊を希望したんです！僕が口リコンなのではありますん！」

ボス「だといいが…まあいい、訓練に戻れ。あとは俺が相手する」

傭兵「はい、それでは失礼します」

そう言つて傭兵は去つていった

ボス「それで、お前が入隊希望者で合つてるか？」

メアリー「はい！」

ボス「いい返事だ。だが、うちの隊に木偶はいらない。だから、毎回実技試験をしているんだ」

メアリー「どんな内容なんですか？」

ボス「俺と戦つて男なら10分、女なら5分持ちこたえられたら合格だ」

メアリー「ナイフを使つた無力化は合格に含まれますか？」

ボス「別にいいが、体格的に無理だと思うぞ？」

メアリー「まあ、聞いてみただけです」

ボス「じゃあ、試験を始めるぞ」

数十分後

ボス「ほう、なかなかやるじゃないか」

メアリー「ハア…ハア…ハア…あの、もうとつぐに5分は経つてるんじや…」

ボス「え? あつ…もう30分経つてた…」

メアリー「やつぱり…ですか」

ボス「いやー、久しぶりの強者だつたから、必死になつてしまつた」

メアリー「よく言いますよ…全然息が上がつてないじゃないですか

⋮

ボス「…バレてたか」

メアリー「何で手を抜いていたんですか?」

ボス「あー、一応言つておくと、手加減は入隊希望者全員にしている事だ」

メアリー「何故そんな事…」

ボス「自惚れているわけじゃないが、俺は何度も死地を潜つてきただけあつてそれなりに強い。だから、本気を出したら、いい人材も門前払いしてしまうことになる。だから、時間で合否を決めているようなことを言つたが、実は俺にどれほど本気にさせれるかで判断しているんだ」

メアリー「私はどれ位の力を出していたんですか?」

ボス「いつもは半分そこらだが、お前には8割方本気だつたし、正直何度も本気を出していたぞ」

メアリー「それは賞賛と受け取つていいんですか?」

ボス「ああ、大賞賛だ。喜んでうちの隊に引き入れよう

メアリー「ありがとうございます!」

ボス「取り敢えず、名前を聞こうか

メアリー「メアリー・フォードです」

ボス「分かつた。俺は皆からボスと言われてるから、メアリーもう呼んでくれ」

メアリー「分かりましたボス!」

To Be Continued

4話 全てが狂い始めた日

メアリーが入隊してから3年後

荒野

ボス「おいお前ら、MSFから依頼が入った。内容はイラク地域のスラム街に住む人たちの救助及び避難の援助だ」

兵士「何名要請がかかっているのですか？」

ボス「最悪交戦する事も考えて、戦績の良い三人ぐらいを寄越して欲しいそうだ」

トム「じゃあ、僕らのチームが行きますよ。一応うちのチームは全員一対多数の戦いには慣れてますし。…誰かさんのせいです…」

ボス「なんだ？俺のせいなのか？」

トム「いや違いますよコイツですよ」

そう言つてトムはメアリーを指さした

メアリー「え？私のせい！」

トム「毎度毎度依頼中にホールドアップ吹っ掛けで敵兵に笑われたお前以外に理由が思い浮かばないんだが異論は？」

メアリー「うつ…」

それを言われてしまつたメアリーは押し黙つてしまつた

トム「まあいい、メアリーは隠密行動が得意なのは事実だし、あとは俺とカルロス行きますよ」

ボス「分かった。お前たち、頼んだぞ！」

三人「了解！」

砂漠地帯

トム「この先を真っ直ぐ進めば紛争地の村に着く筈だな：俺は先に村まで行く、だからお前らは逃走経路を確保しながら、後から来てくれ」

カルロス「分かった。気を付けろよトム」

トム「ああ、お前らもな」

そう言つてトムは走つて森を抜けて行つた

メアリー「それじゃ、私たちもそろそろ行きましょうか」

カルロス「そうだね」

そう言つて二人も森の中に入つていった

ミルフ湖

カルロス「……こら辺もだいぶ安全になつてきたね」

メアリー「ええそうね、こここの近くはまだあまり戦禍は広がつてないみたいだしね」

メアリーがそう言つた直後、カルロスの防弾チョッキに銃弾があつたつた

カルロス「!? まだ敵がどこかに隠れてるのか！」

??? 「チツ、防弾チョッキに当たつたか…」

メアリーは何処からか微かに声が聞こえたのを聞き逃さなかつた

メアリー「何処に居るの！ 出てきなさい！」

そう言うと、意外な事に敵はすんなり出てきた

トム「おいおい、そんなにいきり立つなよ。シワができるぜ？」

なんと出てきたのは、先に村に行つたはずのトムであつた

メアリー「トム！ 貴方まさか…」

トム「ああ、カルロスを今撃つたのは俺さ」

カルロス「何でだ！ 俺らを裏切つたのか!?」

トム「裏切つた？ 違うね！ 俺は元からお前らの仲間なんかじやない

！」

カルロス「どういう事だ！ 詳しく聞かせ…」

カルロスがすべてを言い切る前にその言葉は遮られてしまつた

トム「ヒュー…ナイススナイピング」

なぜなら話している途中に頭を消し飛ばされてしまつたからだ
直後、近くに血とカルロスの残骸が散らばる

メアリー「カルロス！」

おそらく即死だつたのだろう。カルロスはピクリとも動かない

メアリー「…トム！ 私はお前を許さない！」

トム「ひい恐い恐い。だが死ぬのはお前だよメアリー！」

メアリー「…さつきの銃声と着弾のタイミングから考へるに…そこ
か！」

メアリーは何か呟いた後、急にトムの後方5mの岩場目掛けナイフを投げた

スナイパー「ガハツ!」

メアリー「…ビンゴ」

これにはトムも驚いた

トム「（い、一発でスナイパーをナイフで仕留めただと!?）こいつはバケモンか!?」

メアリー「…次はお前だよ…トム！」

メアリーがゆっくりこちらへ近づいてくる

トムはこの時、直感的に理解した。撃たなければ殺されると

トム「う、うわああああ」

トムは必死に銃の引き金を引いたが、焦り過ぎて3発も外してしまった

メアリー「…ずっと仲間だと思つてたのに…まさかそれは私達だけだつたのね…許せない」

だが、4発目はメアリーの脇腹に当たつた

メアリー「うつ！…哀れね」

トム「だ、黙れ黙れ黙れ！」

トムの撃つた銃弾が今度はメアリーの頬を掠める

メアリー「痛つ！そう簡単に死ねると思わない事ね。たっぷり苦しむといいわ！」

少しづつ距離を詰められていく

だが、トムは銃の引き金を何度も引いているが次の弾が一向に出てこない

こんな時にジャムを起こしたかとも思つたが、その後トムは気が付いた

自分の使っている銃はリボルバー。という事は装弾数は6発であることに

急いで弾を装填しようとしたが、それは叶わなかつた

遂にメアリーがトムの前に辿り着いてしまつたのだ

トム「た、助けてくれ！俺が悪かつた！」

メアリー「…醜い！汚らしい！くたばれ！」

そう言いながらトムの上に馬乗りになり、一心不乱にナイフをトムの手足に突き立てて、地面に固定していく

トム「や、やめてくれ！何をする気なんだ!?」

メアリー「何をするかだつて？…お前を今からゆつくり丁寧に切り刻んで、そこの湖に住んでる魚の餌にしてやるんだよ。その為に動かれちゃたまらないから、固定させてもらうわ」

そう言いながら、トムの足を固定し終わつたメアリーがこちらを振り向いた

その顔を見てトムはゾッとした

さつきまで憎しみで満たされていた顔は消え失せ、狂氣的な笑顔を浮かべていたのだ

それは無垢な少女の様でとてもなく残酷な笑顔であつた

その直後に刺されたナイフでトムは息絶えてしまつた

メアリー「…もう死んじやつたの？もつと私を楽しませてよ！綺麗な悲鳴を聞かせてよ！」

そんな事を言いながらトムに何度もナイフを突き刺す

メアリー「…チツ！つまんない奴だつたわね」

そう言いながら、ミルフ湖にトムの死体を投げ込んだ

すると大量の魚が集まつてきて、すぐにトムを食べつくした

メアリー「フフツ…いいきみだわ…」

そう言つて立ち去ろうとして、ある事を思い出した

メアリー「…カルロスを弔つてあげなきや…それに、任務も終わつてないし、二人が死んだんだから私が遂行しないと…」
と呟きながらカルロスの所に戻つていった

荒野

メアリー「…ただいま帰りました」

ボス「ああ、おかえり。依頼は遂行でき…たか？」

ボスが急に言葉を詰ませた

メアリー「どうかしたんですか？」

ボス「だ、大丈夫なのか？体中血塗れだが…」

メアリー「え？…ああ、これはほとんど返り血ですよ」

ボス「ああそうなのか、ならいいんだが…ところで、トムとカルロスは何処に行つたんだ？」

メアリー「…カルロスは、トムの裏切りによつて死にました」

ボス「!? どういうことだ？ トムがお前たちを裏切つたのか!？」

メアリー「…はい」

ボス「そう…か…それで、死体はどうしたんだ？」

メアリー「カルロスは近くにあつた木の下に埋めました。トムの方はミルフ湖の魚の餌にしてやりました」

ボス「は？ どういうことだ」

メアリー「裏切り者らしい最後を与えてあげたんですよ」

ボス「…メアリーが…殺つたのか？」

メアリー「……そうですけど？」

ボス「すまない、かつての同志を殺すのは辛かつたろうに」

メアリー「いや、私は裏切り者を仲間とは認めませんから。でも…」

ボス「ん？ どうしたんだ？」

メアリー「トムを殺つてる時、私はなぜかとても楽しくなつていた

んです。…私は気が触れてしまつたのでしょうか？」

ボス「メアリー、あまり深く考へるな。ちよつと早いが今日は休め」

メアリー「…分かりました。失礼します」

そう言つてメアリーは自分の部屋へと帰つていつた

ボス「…あいつ、このままでは殺人鬼になるやもしれんな」

さつきの会話から、メアリーに殺人衝動が芽生え始めていることに

気が付いたボスは別のチームにメアリーを移すことに決めた

ボス「…影狼の所にあいつを入れて、様子を見てみるか…」

そう呟いて、ボスも自室へと消えて行つた

しかし、メアリーが影狼のチームに入った次の年、影狼とメアリーが依頼中に行方不明となり、後に解剖された影狼の遺体が発見されたが、今だメアリーの生死は判明していない

5話 良心の呵責

玄武の沢

メアリー「…思い出した。何もかも…」
メアリーは苦悩していた

過去の自分の記憶は戻つてきた。そこまでは良かつたのだが、殺人鬼メアリーとしての性格は戻つてこなかつたのだ

メアリー「私…なんてことを…」

殺人衝動にかられていた当時とは真逆に、後悔と罪悪感が押し寄せてきた

メアリー「どうにかして…この罪は償えないかしら?…」

メアリーは必死に考えた

メアリー「…あの人なら、何か良い方法を教えてくれるかも…」

考えた末に、とある考えに至つた

メアリー「でも、最悪の場合はちょっと覚悟を決めといた方がいいわね」

そう呟くと、メアリーは来た道を戻つて行つた

博麗神社

さとり「そう言えば、さつきフリツカさんと一緒にメアリーさんが来ましたよ」

靈夢「ああ、どこかで見たことがあると思つてたけど、メアリーだったのね」

さとり「思考を読んだところ、数年間の記憶が消えているみたいですからけど」

靈夢「あら、そうだつたの」

そんな他愛の無い話をしていると、メアリーがやつて來た

メアリー「こ、こんにちは」

さとり「あら、メアリーさん?」には來ないと言つて…ええ!?それ本当ですか!?

靈夢「ど、どうしたの?」

さとり「…記憶が戻つたそうです」

そのことを聞いた瞬間、靈夢の目付きが変わった

靈夢「!…まさか、私に報復でもしに来たの?」

メアリー「ああいや、そうじやなくて…」

メアリーが口籠る

さとりは不思議に思い、さつきよりもさらに深層まで意識を潜らせた

さとり「…ああ、そういうことですか」

靈夢「なにか分かつたの?」

さとり「何故かは分かりませんが、記憶はあっても以前のような殺人衝動は無くなっているようですね。ちゃんと意識の深層まで潜つたので間違いないです」

靈夢「…さとりが言うならそうなんでしょうね。じゃあ、何の為にここに来たのかしら?」

メアリー「えつと…私の罪を償う為に何か出来ることがあるなら、何でもいいから教えてくれないかしら?」

靈夢「えー…急にそんな事言われてもねえ…」

靈夢は「え? 今何でもつて言つたよね?」と言いたくなつたが、ぐつと我慢した

さとり「靈夢さん、私には筒抜けですよ。あと、メアリーさんは私の見る限りでは本当の意味で何でもつて言つてますよ」

靈夢「え? そうなの?…じゃあ、私が各方面から言われてる妖怪退治を手伝つてくれるかしら?」

メアリー「分かったわ!」

自分に役目が与えられた途端、メアリーは笑顔になつた

メアリー「さつそく、何を手伝えばいいかしら?」

靈夢「(うわ、目がキラツキラしてるんだけど…)んー、じゃあ魔法の森で調子に乗つて下級妖怪共をちょっと懲らしめて来てくれないかしら?」

メアリー「了解!」

依頼の場所と内容を聞くなり、メアリーは走り出して行つた

魔法の森

サニー「さてと、今日は誰に悪戯してやろうかなー♪」

ルナ「サニー…いい加減にしないと博麗の巫女に退治されちゃうわよ？」

サニー「大丈夫だよ！私達三人の力を合わせたら誰にも捕まらないわ！」

スター「二人共静かに！誰かが近づいてきてるわ」

どうやらスターの能力レーダーに何かが引っかかったようだ

スター「相手は…一人か1匹ね」

サニー「なーんだ、つまんないなあ。まあいいや、姿を消すよー」

サニーがそういった直後、三人の姿が消えた。サニーの能力で光を

屈折させて姿を消したのだ

ルナ「一応音も消しとかなきや」

ルナがそう言うと、さつきまで聞こえていた鳥のさえずりが聞こえなくなつた

その少し後、人がやつてきた

メアリー「魔法の森に入つてから真っ直ぐここに来たけど、それらしい妖怪には会わないわね」

魔法の森は結構広い事もあって、特定の人物を探すとなると結構苦労するのである

メアリー「意外と森に入つてすぐのほ…（あれ？）…（声が出ない？）

独り言を言いながら歩いていくと、急に自分の声が出なくなつた事に気が付いた

メアリー「…（鳥の声も聞こえないし、もしかして声が出せないんじゃないなくて、聞こえなくなつたのかしら？）」

そう思い、メアリーは周辺の様子を探つてみた

メアリー「…（あの木の陰に何か気配を感じるわね…）」

何かの気配を感じたメアリーはその気に近付いて行つた

サニー「（え？何でこの子一直線に近づいてくるの⁈まさか私達のことが見えるの⁈）」

だんだん近づいてくるメアリーを見て心配になつてきたサニーで

あつたが、メアリーはサニーたちの前で立ち止まつただけで、それ以上は何もしてこなかつた

サニー「(よかつたあ…見えてはいないようね)」

木の目の前で立ち止まつたメアリーはふと何を思いついたのか、懷からナイフを取り出した

ルナ「(?!この子なんでナイフなんか持ち歩いてるの?!これ見つかつたら殺されるんじや!?)」

その直後、メアリーがナイフを振り上げて、次の瞬間木に突き立った

三妖精「(こ、殺される!?)」

命の危機を感じた三妖精は一目散に逃げ出した

しかし、その時に慌てていたのか、後ろにあつた草が体にあたつて、草が揺れてしまつた

メアリー「(あそこにいるのね!)」

直感を信じてメアリーはその草の少し向こう側にダイブすると、何か手ごたえがあつた

するとその直後、音が聞こえるようになつた

ルナ「ヒィー! 許して! ちよつとした出来心なの!」

メアリー「別に取つて食おうつて訳じや無いわ。さつきのも声が出せないから文字を彫ろうとしただけよ」

ルナ「サニー! スター! 助けてよー!」

パニックになつてゐるのか全然話を聞いてくれない。と言うか一向に透明なままで、どんな顔をしているのかもわからない

メアリー「(…とりあえずナイフをしまつた方がいいかしら? と言ふか、まだ仲間がいるのね)」

そう思い、メアリーは懷にナイフをしまつた

メアリー「何処に居るか知らないけど、別に貴方達と敵対しようとしてるわけではないわ。なんならナイフをそこの木まで転がすけどー?」

そう言つて、持つてゐるナイフ5本を2m横にある木まで軽く投げて武装がないのをアピールした

サニー「…本当に私たちを殺さない？」

そんな声が目の前の木の裏から聞こえた

メアリー「あんな事で殺したりしないわよ。ただ周りの人が迷惑してるみたいだから、やめてほしいって警告しに来たのよ」

そう言うと、さつき声がした木の上、その反対にある木の上、メアリーの足元の三か所にメアリーと同じくらいの背丈の羽がある幼女が姿を現した

メアリー「あら、思つたよりも可愛らしい妖怪ね」

スター「よ、妖怪じやなくて妖精…」

メアリー「あら、そうだつたの」

ルナ「う、ごめんなさいいいい！」

メアリー「えつと、なんでこの子はこんなに怯えてるのかしら？」
サニー「あー…ルナは怖がりだからナイフが相当怖いんじゃないかなー」

メアリー「（今何も持つて無いんだけどなあ…）大丈夫よ。何も怒つてないから」

そう宥めると、やつと落ち着いたようだ

メアリー「まあ、悪戯も程々にしないと靈夢に退治されるわよー」

三妖精「肝に銘じときます！」

ここまで統率のとれた謝罪もなかなか見られないんじゃないかと
いうくらい声がハモっていたので、メアリーは苦笑した

まあ、自分の役目は終わつただろうと思い、メアリーは帰つていつた

た

To Be Continued

6話 同族嫌悪

無名の丘

メアリー「今日は別に何の依頼もないけど、こういう人気のない所で悪事は働くてるものよねー」

そんな事を呟きながらメアリーは歩いていた

すると、どこからか声が聞こえてきた

???「…て…さい！なん…蹴る…か！」

メアリー「ん？今何処かで声が…」

声のした方に足音を立てないように走つていった

すると、その声は次第に大きくなりはつきりと聞こえるようになつてきたので、物陰に隠れて覗いてみた

そこに居たのは20代そこらの男と妖狐と思しき少女だった

モブ雄「ほらほら！もつといい声を聞かせてくれよ！なあ！」

何故だか知らないが、妖狐の少女が男に蹴飛ばされている

メアリー「(何か悪い事でもしたのかしら？それにしても酷いとは思ふけど…)

そんなことを思いながら傍観していたメアリーであつたが、次の会話を聞いて驚いてしまつた

妖狐「私が何かしたというなら謝りますから許してください！」

モブ雄「いいや、謝ることあないさ。別に何も悪い事はしてねえんだからな！」

妖狐「じゃあなんで!?」

モブ雄「何で？そんなのお前が妖怪だからに決まってるじゃねえか！恨むなら妖怪に生まれた自分を恨むんだな！」

その言葉を聞いた瞬間、メアリーはキレた

メアリー「ちょっと待ちなさい！」

モブ雄「ああ!?なんだガキ、なんか用か?」

メアリー「さつきから聞いてみれば、妖怪だから？妖怪として生ま

れた自分を恨め？ふざけた事ぬかすんじや無いわよ！」

モブ雄「なんだよ、人間を襲う妖怪を退治するのは良い事だろ？」

メアリー「本当に性根が腐つてゐるわね。何も悪い事をしていない妖児虐めてる貴方の方がよっぽど退治されるべき存在よ！」

モブ雄「いちいちうるせえなあ……ぶちのめすぞ？」

男がそう言つた瞬間、妖狐はメアリーの周りの空間が急に冷えたようを感じ、ゾッとした

メアリー「ぶちのめす？へえ…やつて貰おうじゃないの！」

メアリーが顔を上げた瞬間、男はその狂気的な笑みに恐怖した

モブ雄「チツ！分かつたよ！やめりやあ良いんだろ！」

男はブツブツ言いながら去つていった

メアリー「ふう良かつた、諦めたわね。妖怪助けるために人間殺してちや意味ないしね」

そんなことを考えながらメアリーは妖狐の下に歩いて行つた

メアリー「貴女、大丈夫？怪我は大したことないかしら？」

メアリーがそう尋ねると…と言うより近付いていく段階で妖狐は怯えていた

メアリー「もしかして、さつきの顔を見て私も危ない人つて認識されてるのかしら？」

妖狐「あ、あの…助けていただいて、ありがとうございます…でも、何ですか？」

返答に少し間が開いたが、応対してくるあたり、完全に怖がられてるわけではなさそうだ

メアリー「何でつて何がかしら？」

妖狐「貴女は…人間ですよね？」

メアリー「？…そうだけど？」

妖狐「なら、なんで私を助けてくれたのですか？助ける意味がないじゃないですか」

メアリーはそんな質問をされて一瞬戸惑つてしまつた

メアリー「…過去の自分への戒めと罪滅ぼし…かしらね」

妖狐「罪滅ぼし…ですか？」

メアリー「ええ…私、昔は殺人衝動があつてね、しかも快楽殺人。何人の人を殺してしまつたわ」

そう言いながら、メアリーは自分を嘲笑つた

妖狐「（よく考えてみれば、さつきの罪滅ぼしつていうのが嘘だつた
としたら、今の状況つて相当危ないんじゃ…）」

妖狐がそう思つて いるのを察したのか、メアリーは妖狐から少し離
れた

メアリー「あら、怖がらせちゃつたかしら？じやあ私はもう行くわ
ね」

そう言つてメアリーは立ち去ろうとして、途中で再び振り向いた
メアリー「一応忠告しておくわ。人間は全員が悪人でも善人でもな
いから、無闇に信じない方がいいわよ。信じなきすぎるのは問題だけ
どね」

そう言い残して、今度こそ立ち去つた

魔法の森

メアリー「（ふう…さつきは柄にもない事をしたわね…）」

そんな事を考えながらメアリーは森の中を歩いていた
すると、背後にあつた木の上から突然…：

ルーミア「隙あり「ないわよ？」うわーーー！」ゴスツ！

ルーミアが襲つてきたが、メアリーに難なく数m先の木に投げ飛ば
されてしまつた

ルーミア「い、痛いのだー…」

メアリー「襲うならもう少しうまくやりなさいよ…」

ルーミア「メアリーは後ろに目でも付いてるのかー？」

メアリー「そんな訳ないじやない…声出しながら襲つてきたら気付
くに決まつてるでしょ…」

ルーミア「うー…失念してたのだー…」

しょんぼりしてるルーミアを見てメアリーは不覚にも可愛いと
思つてしまつた

ルーミア「…もうスペカを使うしかないのだー！」

メアリー「（スペカ？…ああ、あれの事か）」

ルーミア「夜符『ナイトバード』」

ルーミアがスペカを宣言すると、辺りが暗くなり、すぐに全く見え

なくなつた

ルーミア「勝負あつた…あれ？メアリーがいないのだー！」

メアリー「チエツクメイトよ」

そう言いながらメアリーは、初めて会つた時と同じように後ろからルーミアの首元にナイフを突きつけた

ルーミア「何で真つ暗なのに私の後ろをとれるのだー??（≡Δ≡；）

↙

あまりに一方的にやり過ぎてしまつて、ルーミアはちょっと涙目になつてしまつた

メアリー「ただ気配を探つて後ろに立つただけよ」

ルーミア「だけよつて…ますます勝てる気がしないのだー…」

メアリー「まあ、気配を消す練習でもしてみたら？」

ルーミア「うー…分かつたのだー。ところで、今日は何の用で來たのだー？」

メアリー「ただ茸を採りに來ただけよ。でも、よく考えたら幻想郷の山菜つて見た事ない物ばかりだから、毒の有無がさっぱり分からぬいのよね」

ルーミア「その手の話なら、魔理沙が適任なのだー。案内するからついてくるのだー」

そう言われてルーミアについて行くと、いかにもガラクタ小屋と言わんばかりの建物に辿り着いた

ルーミア「魔理沙ー、いるなら返事するのだー！」

魔理沙「なんだ？なんか用か？」

ルーミア「食べられる茸を教えてほしいのだー」

魔理沙「分かつたぜ。じゃあ一緒に行つて採れた茸で食卓でも囮むのぜ」

その後、魔法の森に自生してゐる茸を採つて三人で食卓を囮んだが、見事に魔理沙以外の二人は茸に当たつた

何故魔理沙は平氣なのかを聞いたところ、自分でもわからないが、長年食べるもののだから耐性がついているのではないかと答えていた

た

メアリー「(茸毒に耐性とかあるのだろうか…まあ、あるからこの状況ができるのだろうけど)」

そんなことを思いながらメアリーは自分の住処にしている場所に帰つて いつた

To Be Continued

7話 食人鬼ルーミア

魔法の森

ルーミア「うーん、気配を消すなんてどうやつたらできるのだー？」

ルーミアは悩んでいた

ルーミア「と言うより、この森はメアリーくらいしか人が入つてこないし、そのメアリーは一向に食糧になりそうな気配がないから、どんどんお腹が減つていくのだー…」

ルーミアは久しく人肉を食べておらず、腹を空かせていた

一応、他の肉や野菜でも腹は膨れるのだが、どうしても人肉より早く腹が減つてしまうようだ

その結果、宴会などではその体躯に見合わぬ大喰らいになってしまふのだ

ルーミア「うーん、森の中に入つてきた人間は食べてもいいって靈夢に言われたけど、そもそも入つてこないから全然お腹が満たされないのだー…人里を襲えばすぐお腹はいっぱいになるだろうけど、靈夢に退治されちゃうのだー…」

ルーミアは靈夢と一つ約束をしていた

それは人里の人間を無闇に襲わない代わりに、森に迷い込んできた人間を食べるには黙認するというものだ

この約束は妖怪と人間のテリトリリーを明確にするという点において紫も認可している

無闇に人里を襲えば靈夢に退治され、逆に森などに迷い込んだら人間は命の危険がある。こうすれば両者が互いのテリトリリーを犯す可能性が減り、ただの行き来は自由な為、互いに友好的な者はお互いの土地に赴いて不自由なく交易をする事が出来る

ルーミア「うー…お腹減つたのだー…」

さつきから同じことしか言つていらない気がするなど自分でも思っていたその時

??? 「見つけたぞ！こんな所に居やがったのか！」

ルーミア「？…誰か来たのかー？」

ルーミアが声のした方を見てみると、ひとりの男がそこに立っていた

ルーミア「（…久しぶりの人間なのだー！見た感じそんなに強そ
うでもないし、殺れそうなのだー！）」

モブ雄「てめえ…昨日はよくも邪魔してくれたな！」

ルーミアはその言葉の意味が分からなかつた

ルーミア「邪魔？何の話なのだー？まずお前なんて私は知らないの
だー！」

モブ雄「へつ！やつた方は忘れてても、やられた方は覚えているも
んだけ！」

そう言いながら男が取り出したのは拳銃だつた

おそらく、河童が作つたものなのだろう

ルーミア「一応言つておくが、そんなものでは私は倒せないのだー！」

モブ雄「それはどうかな！」

そう言つて男は銃の引き金を引く

弾はルーミアの腹のど真ん中に直撃した

しかし、最初こそ血が流れていたが、すぐに血は止まり、傷もふさ
がつた

モブ雄「なつ!?お前人間じやなかつたのか!?」

ルーミア「見た目は人間でも、私はれつきとした妖怪なのだー！さ
あ、今度はこつちの番なのだー！」

そう言つて男に襲いかかろうとした時、ルーミアは後ろから呼び止
められた

???「ルーミア、ちょっと待つのぜ！」

ルーミア「！…何の用なのだー？」

ルーミアを呼び止めたのは魔理沙であつた

ルーミア「今ご馳走にありつけそなのだー！邪魔しないでほしい
のだー！」

魔理沙「だから、それをやめろつて言つてるのぜ」

モブ雄「あ、あんた！そいつは人間じやねえ！妖怪だ！」

魔理沙「そんなこと言われなくとも知つてるのぜ。それに、何で妖

怪を攻撃してゐるのぜ？」

モブ雄「今まさに喰われそうになつてゐるからに決まつてゐるだろ！見て分からねえのか!?」

魔理沙「違う違う、私は『今からの話』なんてしてないのぜ『今までの話』をしてるのぜ」

モブ雄「ど、どういうことだ？」

魔理沙「お前、多田野モブ男だろ？結構有名だぜ？弱小妖怪を虐めてばかりいる弱虫だつて」

ルーミア「とにかく、なんで私を止めるのだー？私が何を食べようが魔理沙には関係ないのだー！」

魔理沙「いや、関係あるのぜ。だつてここ、私の家の前だぜ？こんな所で食事されたら私の家まで臭いが来るのぜ」

ルーミア「で、でも、せつかくのご馳走なのだー！」

魔理沙「別に喰うなとは言つてないのぜ。もつと向こうで、そうだな：森の奥で喰つてくれないか？」

その言葉を聞いた瞬間、男は耳を疑つた

今回の会話を聞いてゐる限り、彼女は人間のはずだ

その彼女があろうことか、食人を否定せず、臭いの届かぬ所で喰うのなら構わないと言つてのけたのだ

男は命の危険を感じ、必死になつて走つた

ルーミア「…これでいいのかー？」

魔理沙「ああ、ありがとな」

ルーミア「ああもう！今の人間は脂がのつてて美味そだつたのだー！」

魔理沙「スマシスマン、家でキノコ料理をざこ馳走してやるから機嫌直せつて！」

ルーミア「魔理沙の作るキノコ料理は耐性がないと食当たりするから嫌なのだー！」

魔理沙「大丈夫だつて！今日の茸はちゃんと一般的な食用茸なのぜ」

ルーミア「例えばどんなのがあるのだー？」

31

魔理沙「ベニテングダケだろ、ヒトヨタケだろ、ボルチーニだろ、それに今日は奇跡的に松茸も手に入つたのぜ」

ルーミア「…ベニテングダケは毒キノコだつた気がするのだー」

魔理沙「生で食つたらそうだけど、ちゃんと毒抜きすれば普通に食えるのぜ。ヒトヨタケの方は酒と一緒に食つたら大変な事になるがな！」

ルーミア「…分かつたのだー…過ぎた事を延々と言つてもしようがないから許してやるのだー！そのかわり、食糧が無くなるまで食つてやるから覚悟するのだー！」

魔理沙「うわっ…それは勘弁して欲しいのぜ…」

そんな会話をしながら魔理沙宅へ二人は消えて行つた

結論だけを述べるなら、ちゃんと調理されていたのか、今回は毒に当たらなかつた

そして、宣言通り魔理沙宅にある全食料をたいらげた

To Be Continued

8話 同業者

迷いの竹林

妹紅「ハア…また輝夜との殺し合いはうやむやにされてちまつたな」

いつもの如く永遠亭に行つて輝夜と死闘をしかけてきた妹紅であつたが、最近は向こうが気乗りしないのか酒の大飲みや座戦がほとんどである

かくいう妹紅自身も、もう千年以上経つた今では昔ほど輝夜を恨んでいいのだが、昔の習慣は未だに抜けぬようで、気まぐれでも輝夜と戦つていないと落ち着かないのだ

妹紅「またフリツカに怒られちまうかもな…」

そんな事を考えながら自宅への帰路についていた時、ふと少し離れたところで声がした

??? 「…さい！…なら…わよ！」

妹紅「ん？こんな時間に物好きな奴が誰か喧嘩でもしてるのか？」

見事なまでのブーメランを受けそうな発言をしながら声のする方へと歩いて行つた

すると、そこには二人の少女と小さな鶴がいた

小さいとは言つても2mを超すような化け物ではあるのだが

鶴「何故だ！お主に我を止める権利はないはずだぞ！」

メアリー「この子供が本当に偶然ここに迷い込んだのならそうでしょう。でも、貴方は自分の能力で人間に化けて、この子を誑かしてここまで連れてきたのはお見通しなのよ！」

鶴「くつ！だが、お主が我にかなうとは到底思えん！その娘を諦めて立ち去れ！」

メアリー「あら、それはどうかしらね！」

メアリーは一足で鶴との距離を詰め、鶴の足を蹴りはらつた

そのせいで鶴は盛大に転び、膝をつくことになつた

鶴「ぬう…人間にしてはやるではないか。我也本気を出すとしよ

そう言うと、鶴の形態が猿から虎になつた

メアリー「(この子をかばいながらは流石に危ないわね……)お嬢ちゃん、早く人里まで走つて逃げなさい！助けは呼ばなくていいから！」

少女「う、うん！分かった。ありがとうお姉ちゃん！」

そう言つて少女は人里まで必死に走つていった

メアリー「さあ、お目当ての女の子はもういないわよ！」

鶴「チツ！もうお主でも良い！我は腹が減つているのだ！」

そう言いながらメアリーに突進してきた

メアリー「フツ：単純な動きね」

メアリーは余裕綽綽に鶴の突進を避け、すれ違いざまに鶴の目にナイフを刺し、視界を奪つた

鶴「ぎやあああああ！」

メアリー「そんな単純な突進じゃいつまで経つても私には当たらないわよ」

鶴「この鶴を愚弄するか！」

鶴が潰れた目を開くと、みるみる傷が塞がつていった

メアリー「やつぱり、ただの武器じゃ一時的な傷にしかならないか

⋮

鶴「許せん！八つ裂きにして喰つてやる！」

今度は周りの竹を駆使して不規則な軌道で攻撃してきた

本来、竹は頑丈だとよく言われているが流石に数百kgにもなる者の体重を支えられるわけがない。しかし、迷いの竹林の竹は魔法の森の木同様妖気に晒され続け、そうそう折れなくなつていて

むしろ、強度が増している事で反発力も強くなり大きなパワーを生み、鶴の攻撃は速くなつてきた

メアリー「だからそんな動きじゃ当たらないって…!?」

まだ多少不規則でも目で追えないまでではないため、さつきと同じ結果になるだろうと思つていたメアリーだつたが、すれ違う時に尻尾の蛇でも攻撃してきたことで攻撃の隙が無くなつていた

しかも、鶴のスピードはまだまだ速くなつていき、少しずつ目で追えなくなつてきた

メアリー「くつ、攻撃の間隔が小さくなってきたわね…痛っ！」

遂に防ぎきれなくなつた攻撃がメアリーに当たる

鶴「ほれほれ！さつきまでの威勢はどうした！」

メアリー「（流石に虚勢張り過ぎたわね…私も）ここでおしまいかしら？」

そんな事を考えていた矢先

妹紅「呪札『無差別発火の符』」

鶴「なぬ!? があああ！ 熱い！ 体が焼ける！」

数秒悶えた後に鶴は焼け死んだ

妹紅「お前さん大丈夫かい？」

メアリー「ええ、助かったわ」

妹紅「あれ？ お前は…メアリーだつけ？」

メアリー「ええ。 そう言う貴女は、フリツカちゃんと一緒に居た妹紅で合つてたつけ？」

妹紅「ああ、でも本当に別人みたいになつてるんだな」

メアリー「殺人鬼も更生したらまともになるのよ」

妹紅「え？ それを覚えてるつて事は、記憶が戻つてるのか？」

メアリー「そうね。 その後で靈夢にこの役割を任せられたのよ」

妹紅「この役割つて…妖怪退治か？」

メアリー「んー、どつちかと言うと人妖問わず助ける自警団みたいな立場ね」

妹紅「（という事は、私と大まか同じ事をしてゐつてわけか） そう、それならこつちとしても助かるわ」

メアリー「そう言えば、妹紅も自警団をしてゐるよね？ なら同業者になるのかしら？」

妹紅「まあ、 そななるかもな。 ジャあ私はもう行くから、 あんたも氣を付けて帰るんだよ」

メアリー「ええ、 分かったわ」

そう言つて二人はその場を立ち去つた

妹紅の家

妹紅「ただいまー」

フリツカ「おかれり妹紅、もしかしてまた輝夜さんと喧嘩してきたの？」

妹紅「ま、まあ、そんな感じだな」

フリツカ「もう…どうせお酒飲みまくつたりするだけなんだから、楽しく飲めばいいのに…」

妹紅「そとは言つてもなあ…もう数百年やつてゐる事だから今更仲良くなんて…」

フリツカ「でも輝夜さんも妹紅も一緒に飲んでる時、楽しそうよ？昔にいろいろあつたのは知つてゐるけど、1300年も前の事でしょ？そろそろ時効にしてあげてもいいんじゃない？」

妹紅「（なんだか口調が慧音に似てきたな…）そう言えば何年か前に慧音も同じ事言つてたな」

そんなことを思いながら、ふとあることを思い出した

妹紅「あつ、そうだ。今帰つてくるときに大ニュースを手に入れたよ」

フリツカ「大ニュース？」

妹紅「ああ、メアリーと竹林の途中で会つたんだけどね。妖怪に襲われた女の子を助けてたよ」

フリツカ「女の子を助けた？やつぱり別人みたいになつてゐるのね」

妹紅「しかも、記憶が戻つたみたいなんだけど、更生して靈夢の手伝いをしてるそうだよ」

フリツカ「え!?メアリーの記憶が戻つたの!?また何か企んでるんじや…」

妹紅「いや、それは多分ないな。人里の人間にはメアリーは極悪人つて事になつてゐる。何か企んでるなら、今は良くも悪くも目立つたくないはずだよ」

フリツカ「それはそうかもしれないけど…」
妹紅「まあ、心配なら、明日にでも靈夢の所に行つて直談判してきなよ」

フリツカ「うん、そうするわ。それじゃお休み」

そう言つてフリツカは布団に入り、すぐに寝息を立て始めた

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

9話 抑止力

博麗神社

靈夢「ふう…今日も退屈な一日が始まつたわねー…」
そんな独り言を言つていると、フリツカがやつてきた

フリツカ「靈夢おはよー」

靈夢「あらフリツカじやない。おはよう。何か用かしら?」

フリツカ「用つて言うより、事実確認かな?」

靈夢「事実確認?」

フリツカ「…メアリーの記憶が戻つたつて聞いたんだけど?」
靈夢「ええ、記憶が戻つてもあの殺人衝動は無くなつたみたいだけ

どね」

フリツカ「それを鵜呑みにしたの?」

靈夢「まあ、あの時はさとりも居たし、その事についてはかなり信憑性が高いわね」

フリツカ「んー、まあ、さとりさんが居たなら信じざるを得ないか」

靈夢「で、どうするの?」

フリツカ「?どうするつて何が?」

靈夢「記憶が無くなつていたちよつと前までならいざ知らず、今は記憶がある。つまり、あんたとの過去も思い出してるだろうから、復讐するのかつて聞いてるのよ」

フリツカ「…正直、戸惑つてるわ」

靈夢「戸惑つてる?」

フリツカ「ええ、私の知つてるメアリーは殘忍で、狡猾な人間だった。でも、行方不明になつた後に見つけた時も妹紅に聞いた限りでの記憶が戻つた後の様子も何処にでもいるような普通の少女なのよ」

靈夢「そうね。それに関しては私も驚いてるわ」

フリツカ「あれは本当に…メアリーなの?ただのそつくりな別人なんじやないのか?つて思うようになつてきたのよ」

靈夢「つまり、復讐心が薄れてきてはいるけど?」

フリツカ「結果的には、そうなるわね」

そんな話をしていると、誰かが神社前の階段を上ってきた

メアリー「ふう…毎回この階段上るのはさすがに疲れるわねえ…」

フリツカ「メアリー…」

メアリー「!?: フリツカちゃん」

フリツカ「記憶が…戻ったんですってね」

メアリー「ええ…今更自分のやつた事の言い訳も弁明する気はないわ。八つ裂きにしたいなら好きにしなさいな」

そう言つて両手を広げ無抵抗をアピールした

フリツカ「…いや、やめておくわ。今は人の役にたつてるようだし

ね」

メアリー「そう…ありがとう」

フリツカ「…ただし、次何か変な行動をしたら容赦しないわよ」

メアリー「ええ、肝に銘じておくわ」

フリツカ「ああそうだ靈夢、前に言つてたマミの件はどうなつたの？」

靈夢「ああ、あれなら私よりもメアリーの方が詳しいわよ」

フリツカ「え? なんで?」

靈夢「私が他の事で忙しかつたから、その件をメアリーに頼んでおいたからよ」

メアリー「あー、あれなら多分解決したわよ。マミを虐めてた子供は叱つておいたし、人里の近くに住んでたマミ達を一切合切近くの森とか洞窟に身を隠して無闇に出てこないように言つたし、あれからマミゾウさんも言つてこないつて事は、あれ以降問題が起きてないつて事でしょ?」

靈夢「ええそうね」

フリツカ「そう言えば、さつき退屈つて言つてたけど、最近は前みたいに依頼が来てないつて事なの?」

靈夢「そうね、前までは忙しいことこの上なかつたけど、良くも悪くもメアリーは顔が知れてるから妖怪も人間も近くにメアリーがいるだけで抑止力になつてるので」

フリツカ「元悪人だからこそ悪事が起きやすい所は熟知してるので」

事ね。なんだか皮肉だわ…」

メアリー「まつたくね。でも、こんな私が恐れられることで抑止力や人柱になつて役に立てる。それだけで今までの悪事の償いになるんならなんでもいいわ」

フリツカ「（本当に…何でこんな考えができる奴があんな殺人鬼なんかになつちやつたのかしら？）」

フリツカは戸惑っていた

過去にあれほどの事をしたこの狂人の本質的な性格がこんなにも綺麗なものだつたのかと、罪滅ぼしとはいえここまで自己犠牲を厭わぬ人間になれるのかと

靈夢「そう言えば、前から少し引っかかってたことがあるのよね」

メアリー「引っかかってる事？」

靈夢「ええ、あんたが前に起こした事件の時の一回目の似顔絵とあんたじや少し違うところがあるのよね」

メアリー「そうなの？」

靈夢「赤い髪、紫の目つて言うのは同じなんだけど、それ以外の特徴が合わないのよね」

紫「それは私が彼女の年齢の境界を曖昧にしたからよ」

靈夢「あら、生きてたのね紫」

フリツカ「（ビ、ビックリした…）」

紫「そうそう簡単に私はくたばらないわよ」

靈夢「そうね、あんたはゴキブリ並にしぶといものね」

紫「あら酷い」

フリツカ「それより、年齢の境界を曖昧にしたってどういう事？」

紫「論より証拠よ。これを見なさいな」

紫がメアリーに手をかざすと、メアリーの姿がどんどん成長し、女性になつた

靈夢「なるほど、確かに一回目の似顔絵に合致して昔のルーミアにそつくりね」

メアリー「ゆ、紫、さつきの姿に早く戻して欲しいんだけど」

紫「え？ なんでかしら？」

メアリー「さつきまでずっと小さい頃の姿だったから、そつちに慣れちゃつたし、その、服が…キツイ」

少し顔を赤らめながらメアリーがそう言つた

紫「あら、分かつたわ」

紫がもう一度メアリーに手をかざすと、再び子供の姿に戻つた

フリツカ「何で十年以上姿が変わつてなかつたのか、ようやく理解出来たわ」

メアリー「ところで、あれから新しい依頼は来てないのかしら？」

靈夢「そうね…あんたが一日に5件も6件も仕事を片付けていくから、今はからつきし依頼は来てないわね」

メアリー「そう、じやあ暇潰しに見回りして帰るわ」

そういうてメアリーは去つていつた

フリツカ「…一日5、6件つて多過ぎない？内容によるだろうけど」
靈夢「ええ多すぎるわ。私達みたいに空を飛べるならまだわかるけど、メアリーは普通の人間だからいつも現場まで走つていつてるわ。しかも本人曰く、ほとんど戦闘ありっぽいし」

フリツカ「キ、キチガイじみた体力ね…」

紫「あの体力には私も驚かされるわ」

靈夢「で？何の用？あんたから来るなんて珍しいじゃない」

紫「ちょっとまずい事が起こつてね」

フリツカ「まずい事？」

紫「なんでだか知らないけど、幻想郷で銃器の弾が見つかつたのよ」

靈夢「…別に不思議でもないんじやないの？火縄銃とかあるんだし」

紫「見つかつたのは火縄銃の弾じゃなくて、多分…拳銃の弾よ」

靈夢「ケンジユウ？何それ？」

フリツカ「拳銃！」

紫「まあ簡単に言えば片手サイズの銃つて感じね。もちろんそんなもの幻想郷に持つてきた記憶も迷い込んだ記憶もないわ」

靈夢「じゃあ河童達が作つたって事？」

紫「おそらくね。でも、河童の技術が発展してゐるからと言つて、あ

んな物作れる程ではなかつたはず。何かモデルとなる物が無いと作
れない筈なのよ。靈夢、心当たりあるでしょ？」

靈夢「：童子のモーデルガンとかいうやつね」

紫「ええ、それしか思い当たる節がないわ。あの時、河童のにとり
もあの場にいたから、辻褄があうわ」

フリツカ「内容がさっぱり分かんないんだけど、銃が量産されてる
のつて、結構やばいんじやないの？」

靈夢「かなりやばいわ」

紫「ええ、妖怪と人間のパワーバランスが崩れかねないわ。いくら
妖怪が死ににくいとは言つても、弱小妖怪はそこまで頑丈じゃないし
ね。とりあえず、行くわよ靈夢」

そう言つて2人は妖怪の山にある河童の里まで飛んでいった
フリツカ「…ここに居てもしようがないし、私も帰ろつと」
そんな独り言を言いながら、フリツカは階段を降りていった
人里 とある民家

男1 「二人共、銃は手に入つたか？」

男2 「ああ、手に入つたぜ」

男3 「久しぶりの妖怪狩りだねえ」

男1 「決行は3日後、あのクソ生意氣なガキは絶対殺すぞ！」

男達 「オー！」

To Be Continued

10話 紅魔館

博麗神社

メアリー「ねえ、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

靈夢「聞きたいこと? 何かしら?」

メアリー「少し前に戦つた妖怪が『もう少しでコイツの知恵を手に入れられたのに!』って怒鳴つてたんだけど、どういう事?」

靈夢「ああ、あんたは知らなくて当然か」

メアリー「?…どういう事?」

靈夢「まず、人間の記憶がどこに宿つてると思う?」

メアリー「え? そりや頭の脳じゃないの?」

靈夢「確かに脳にも記憶は残つているわ。でも、それ以外にも他の四肢や体にも宿つていると考えられているわ」

メアリー「え? そうなの?」

靈夢「聞いたことないかしら? 『頭で考えてみても思い出せないけど、実際やってみると体が憶えてるもんだ』って」

メアリー「んー、なんか聞いたことはあるような気がするわ」

靈夢「言われてるだけで、何の根拠もないけどね。まあとりあえず、妖怪は元々人間の思想や思い込みから生まれてくる。だから、生まれたての妖怪は人間と同様、無知なのよ」

メアリー「…それってつまり、人間を食べてその人間の記憶を取り込むつてこと?」

靈夢「ええ、ある程度成長したらただ単に食料として襲うみたいだけどね」

メアリー「(…ルーミアが執拗に私を食べることにこだわつていてるのは、これがあるからなのかしら?)」

靈夢「どつかの吸血鬼は『その者のすべてを喰らえばその者の魂をも取り込める』とか言つてるけど、どこまでが本当なのかわかつたものじやないわ」

メアリー「へえ、その吸血鬼つてどこに住んでるの?」

靈夢「霧の湖にある館よ。でも、会に行く気なの?」

メアリー「ええ、面白そうだし、何より本物の吸血鬼に会つてみたいわ」

霊夢「あんたも物好きねええ！」

メアリー「褒め言葉と受け取つておくわ」

そんなことを言いながらメアリーは神社を去つていった

霧の湖

メアリー「この近くの館つて聞いたけど、その名に違わず霧が濃いから、どこに館があるのかさっぱり分かんないわね」

???「あんた何してるの？」

そう後ろから話しかけられて、メアリーが振り返つてみると

メアリー「：妖精？」

???「そうだよ！アタイは最強の氷精チルノ！」

その妖精はチルノと言うらしい

メアリー「私はメアリーよ」

しかし、なんとまあ：子供特有の全能感丸出しである

メアリー「ところで最強のチルノちゃん、ちょっと教えて欲しい事があるんだけどいいかしら？」

チルノ「なになに？アタイなんでも知つてるから何でも聞いていいよ！」

そのドヤ顔を見て、可愛いなあと思いながら、撫でたい気持ちをぐつと押さえ込んで話を切り出した

メアリー「この湖の近くに大きな館があるって聞いたんだけど、知つてる？」

チルノ「大きな館？紅魔館のこと？」

メアリー「んー、分かんないけど、吸血鬼がそこに居るなら多分そうね」

チルノ「うん、吸血鬼なら確かにいるよ。アタイも時々一緒に遊ぶし」

メアリー「じゃあ、そこまで案内してくれないかしら？」

チルノ「いいよ！なんたつてアタイは最強だからね！」

メアリー「ありがとう」

そんなことを言いながら、気が付くとチルノの頭を撫でまわしていた

チルノ「えへへー、褒められたあ（●、の、●）ゞ」

チルノのその無垢な表情を見て抱きしめたくなつたが、流石にこれ以上は引かれると思い踏みとどまつた

紅魔館 門前

チルノ「ここが紅魔館だよ」

メアリー「意外と近かつたわね。ありがとう」

チルノ「じゃあねメアリー」

メアリー「ええ、またね」

チルノが手を振りながら飛んで行つた

メアリー「さてと、門は何処かしら？」

そんな事を呟きながら壁伝いに進んでいくと、門と思しき場所についた

そして、その門の前には誰かが立つていた

メアリー「（あれは…門番かしら？でも、ここから見た感じ、寝てるような…）」

そんな事を思いながら近づいて行き、メアリーは驚愕した

メアリー「ベルさん！？なんでこんなところに!?」

その声でその人物が起きてしまつた

ベル？「はっ!?ち、違います！ちゃんと起きてましたよ咲夜さ…あれ？」

急に起きたかと思うと誰かに弁明の様な物をしていたが、その人物がいない事に気が付くと安堵の表情を浮かべた

ベル？「よかつた、咲夜さんは来てないわね…ん？あなたは誰でしょう？」

メアリー「ベルさん：じゃないわね」

ベル？「へ？誰ですか那人、私は紅美鈴ですよ」

メアリー「（ルーミアといい、この人といい、こつちの世界には瓜二つな人が多いわね」

そんなことを思つていると、門の中から誰かが出てきた

??「美鈴、貴女今日も居眠り…今日は寝てないのね。異変かしら？」

美鈴「咲夜さんは失礼ですね…私だっていつも寝てる訳じゃ無いですよ」

咲夜「あら、1000日門番やつて999日は寝てる人の言葉とは思えないわねー」

そんなことを言いながらメイド服の裾からナイフを取り出し、美鈴につきつけた

メアリー「!?そのナイフ、なんで貴女も持ってるの?」

咲夜「え?これは私のナイフだから私が持つても不思議じやないはずなんだけど?と言うより、貴女『も』ってどういう事かしら?」

メアリーはそう聞かれて、腰元からナイフを取り出した

咲夜「何で貴女が私のナイフを…いや、違うわね。それは私が現世で使つてたタイプのナイフね。貴女こそ何処でそれを手に入れたの?」

メアリー「師のベルさんにもらつたのよ」

咲夜「ベル?それつてもしかして、ベル・スマスのこと?」

メアリー「ええ、そうよ。知ってるの?」

咲夜「そりや、昔の弟子ですもの」

メアリー「え!じゃあこのナイフつて…」

咲夜「ええ、私がベルにあげた物よ。でも、幾ら素手専だからって、師に貰つた物を他人にあげないで欲しいわ…」

咲夜は少し呆れたような表情を浮かべた

咲夜「まあいいわ。そのナイフ、大事にして頂戴」

メアリー「ええ、大事にするわ」

咲夜「そう言えば、紅魔館に用があるんでしょう?入りなさいな」

メアリー「ありがとう。お邪魔させてもらうわ」

咲夜「じゃあ、引き続き門番よろしく…つて、やつぱり寝てるじやないの!」

そう言つて勢いよくナイフを美鈴の頭に突き刺した

美鈴「いつつたああああ!!!!」

いや、痛いでは到底すまないでしょつと思ひながらメアリーは紅魔

館の中に入つた
To Be Continued

11話 永遠に幼き紅い月

紅魔館

メアリー「今更だけど、用件も聞かずに私を館にあげてよかつたの？もしかしたらテロリストかもしれないのに」

咲夜「そんなもの、時を止める私にかかるべき問題ではないわ」

何そのチート能力：DIOみたい

咲夜「ところで、紅魔館になんの用なのかしら？」

メアリー「靈夢からここに住んでる吸血鬼のお嬢が『人間を喰つたら魂をも取り込める』と話してたから、詳しい話をと思つて来たのよ。まあ、大半私がただ単に吸血鬼に会いたかつただけなんだけどね」

咲夜「あの脇巫女は、また適当な事を言つてるのね…」

メアリー「え？ ジやあ、嘘なの？」

咲夜「いや、そもそも言ひきれないわね。あのお嬢様だもの、出来るかどうかは別として仰る可能性もあるわ。まあ、実際に会つて聞いてみたらどうかしら？」

そう言つて咲夜はとある部屋の前で立ち止まつた

咲夜「お嬢様、御客人が来てますのでお通しして構いませんか？」

???「え！ ちょ、ちよつと待つて！ 一分だけ待つて！」

そう言つて部屋の中からドタバタと音がして、ちようど一分後に咲夜が部屋のドアを開けた

???「も、もうちよつと待つてよう…」
咲夜「一分だけ待てと言つたのは貴女でしょう？ レミリアお嬢様？」

メアリーは意外だつた

先程までの話に聞いている通りなら、お嬢様はとても威厳があつて、凜々しい人物なのだと思つていた

しかし、今しがた咲夜にお嬢様と呼ばれた者は幼く、部屋に色んなものが散乱しているような、可愛らしい少女であつた
メアリー「…この人が、貴女の主？」

咲夜「ええ、可愛いでしょ？」

メアリー「ええ、とつても可愛いらしいわ」

レミリア「ちよつと咲夜！主に向かって『可愛い』とはなによ！」

咲夜「良いじやありませんか。大変麗しゆうござりますよ」

レミリア「うう…ところで、御客人っていうのは、この子かしら？」

咲夜「はい、以前お嬢様が宴会の時に『食した者の魂を取り込める』と言つていた事について聞きたいのだそうで」

レミリア「そうは言つても、これでも私は忙しいのだけど？」

咲夜「ほう、例えば何が忙しいのでしょうか？」

レミリア「ステファ…いろんな世界の運命を操つて囚われた者を救つたり「ゲームをしたいだけですね」最後まで言わせてよ！」

どうやら幻想郷にはステファミは入ってきてるらしい

咲夜「とにかく、日中お外に出れないお嬢様はただでさえ外交関係がないですから、偶には外の者とも対話をしていただきないと、紅魔館の主が廃れますよ？」

レミリア「うつ…分かったわよお」

咲夜「それでは、私は失礼します」

そういつた直後、咲夜が一瞬で消えた

その代わりにレミリアとメアリーの前に紅茶が置かれていた

レミリア「それで？何で私が人間の魂を取り込む事に興味があるのかしら？」

咲夜がいなくなつた途端、レミリアが急にカリスマ全開になつた

メアリー「貴女が…と言うより、妖怪が食べた人間の知力や技術を自分のものにできるつて言うのを詳しく教えてもらいたいって感じですね」

気づけばメアリーはレミリアに対して敬語になつていた

レミリア「細かい事を言うと、食べた人間の全ては自分の物に出来ないんだけどね」

メアリー「そうなんですか？」

レミリア「最初の頃は食べた人間の知識の大部分を取り入れられるんだけど、ずっと食べしていくうちに一人あたりから得られる知識が少

なくなつてしまつたり、低能で得るもののが無くなかつたりするから、ただの食糧としか扱わなくなつてしまつたのよ」

メアリー「ゲームの経験値みたいですね」

レミリア「まあ、簡単に言つたらそうかもしれないわね」

メアリー「一応聞いておきたいんですけど、貴女が以前言つていたという「喰い尽くした者の魂を取り込める」と言うのは本当なんですか？」

レミリア「ええ、本当よ？なんなら貴女で試してあげましょか？」

レミリアが不敵な笑みを見せた

メアリー「いえ、遠慮しておきます。ただ、一つお願ひしたい事が」

レミリア「あら、何かしら？」

メアリー「お手合わせ…していただけませんか？」

レミリア「…フツ…ハハハ！面白い事を言うんだねえ！私と手合わせ？相手になるわけがない！」

レミリアはケラケラと見た目相応、だがとても綺麗な笑みを浮かべた

メアリー「ええそうでしようね。でも、知りたいんです。本当の吸血鬼と言うものを、この肌で」

レミリア「本当に面白いやつだ！いいわ、受けて立とうじやないの！」

そう言つてレミリアに、とある部屋へと案内された

紅魔館 魔導室

レミリア「ここならある程度暴れても大丈夫よ」

メアリー「そうですか（さて、私は何秒持ち堪えられるかな…）」

レミリア「そうだ、ただ遊ぶだけではつまらない。何かを賭けようじゃないか」

メアリー「分かりました。なら…私が賭けに勝つたら貴女を抱きしめさせてください」

レミリア「なるほど、なかなかに屈辱的な罰ゲームだねえ。じゃあ、私が勝つたらお前の血を少しばかり頂こうかな。もちろん直吸いで。ああ、別に私が吸血したからって吸血鬼にはならないから安心しな」

メアリー「それは安心ですね」

勝敗の判定はお前が戦闘不能になるか降参する前に私に目に見える傷を付ければ、でどうだ？」

メアリー「なるほど、それなら私にもまだ勝機がありそうですね」
レミリア「私から行つても興が削がれる。お前の方から来るといいわ」

メアリー「分かりました。行きますよ！」

そう言つてレミリアに一直線に突進しナイフで切りつける…と見せかけて足をはらつた

レミリア「あらあら、なかなか技巧派じゃないの。危うく転んで顔を擦りむいてしまう所だったわ」

しかし、レミリアは逆にその足払いを利用して横一回転をして悠々と立つていた

メアリー「まだです！」

次はナイフをレミリアの顔と体に投げてそれを追うようにレミリアに突進した

レミリア「甘いわね。その程度じゃ私は…え？」

レミリアは飛んできたナイフを両方空中で掴み軽く反撃しようとしたが、そこにはメアリーの姿はなかつた

レミリア「…!上か！」

そう思い上を向くと、メアリーがナイフを振りかざして落下してきました

レミリア「場所を悟られちゃおしまいよ！」

そう言つてさつきメアリーから奪つた二本のナイフで鍔迫り合いをしようとした。だが…

レミリア「なに!?」

メアリーのナイフと刃が振れた瞬間、レミリアの持つていた方のナイフの刃が欠け、折れてしまつた

しかし、流石吸血鬼、人外の反射速度でナイフを白羽取りし、そのままメアリーを投げ飛ばした

レミリア「お前…わざと脆いナイフを私の方に投げたのか？」

メアリー「ええ、貴女にその戦術が通じてよかつたですよ。まあ通じた上でもナイフを防がれちゃいましたけどね」

レミリアは驚愕した。目の前にいる娘は咲夜の様な能力はない。美鈴の様な腕力もない。なのに、この気高き吸血鬼レミリア・スカーレットに人間如き攻撃で欺き、負けを意識させるという事をしてのけたのだ

レミリア「…どうやら、私はお前を侮っていたようだ。こちらも少し本気を出そうかねえ」

レミリアがそう言うと、人間であるメアリーにも分かるほどレミリアの霸気が大きくなつた

その後の展開は言わずもがな、一瞬で負けた

メアリー「やつぱり、ただの人間じや吸血鬼には勝てませんね」

レミリア「分かりきつていたことだ。だが、なかなかに楽しませてもらつたぞ？お前ならそこいらの妖怪には負けないくらいには強かつたしな」

メアリー「お褒めに預かり光榮です」

レミリア「まあ、約束は約束だ。少しばかり血をもらうぞ」

メアリー「ええ、どうぞ」

そう言つて首を晒した

レミリア「？…ああいや、私は首からじやなくて、指から吸いたいんだが」

メアリー「え？指から…ですか？」

レミリア「首からじや血が出すぎて飲みきれんからな」

そう言つてメアリーの人差し指を少し噛み切つて血を吸い始めた

メアリー「（ヤツバイ！）の構図めっちゃ萌える！」

レミリア「…ふう、もうお腹いっぱいだ」

さつき吸い始めてからまだ数分なのに、もう十分だそうだ

メアリー「凄く小食なんですね」

レミリア「ああ、魂を取り込めると言つたものの、私の場合血肉ど

ころか血も飲み干すのもかなり時間がかかるわね」

その苦笑いをしている吸血鬼にはさつきまでの霸気は見受けられ

なかつた

レミリア「ところで、まだ何か用はあるのかい？」

メアリー「いえ、もう充分楽しませてもらいました。そろそろお暇させてもらいます」

レミリア「そうかい。またいつでもおいで。また相手になつてあげるわ」

メアリー「ありがとうございます。それでは」

そう言つて、メアリーは紅魔館から帰つていった

To Be Continued

12話 悪夢の目覚め

博麗神社

メアリー「そういえば、前に私の下の姿が昔のルーミアに似てるって言つてたけど、昔のルーミアってどんな感じだつたの？」

靈夢「昔のルーミア？」

メアリー「ええ、なんか今と昔じや全然違うみたいなこと言つてたから」

靈夢「まあ、確かに全然違うわね」

靈夢はそう言うと、一呼吸おいて話し始めた

靈夢「ルーミアの頭についてるリボンは知ってるわよね？」

メアリー「ええ、それがどうかしたの？」

靈夢「あれはルーミアの力を抑制してる制御符なの」

メアリー「そんなに危ない妖怪だつたの？」

靈夢「狂暴だつたというか、大喰らいにも程があつて、昔に人里の人間を食い尽くしかけたことがあつたのよ。だから先代の巫女にあの符を付けられて、出来るだけ食べる量も消費する量も減らしてるのでわけ」

メアリー「そんなことされた割にはのんびり生活してる様に見えるわね」

靈夢「符を受けられた時の反動なのか、一部の記憶が曖昧だそうよ。符自体はルーミアの手で取れないし、とつたらまずい事になるつて事は理解してるみたいだしね。まあ、私自身もその姿を見たのはだいぶ前のことだけだね」

その時、一瞬靈夢がなにか思いついたかのような顔をした

靈夢「現世風に言うなら、私にとつては昨日（過去）の出来事だが、君達にとつては多分…明日（未来）の出来事だつてやつね」

メアリー「やめてよ…靈夢の発言は現実になるつて有名なんだから

⋮

靈夢「あら、それじゃあ私が疫病神みたいじやないの」

そんな話をしていると、魔法の森の方で轟音がした

メアリー「な、なに!? 今なんかすごい音がしたわよね!？」

靈夢「ええ、魔法の森の方から聞こえたわよね…!？」

すると、靈夢が急に驚愕の顔を浮かべた

メアリー「どうかしたの?」

靈夢「…さつきの言葉、撤回するわ」

メアリー「さつきの言葉? …? まさか!？」

靈夢「ええ、なんでだか知らないけど、ルーミアの妖気がどんどん大きくなつていつてるわ。それこそ、全盛期並みにね」

メアリー「それって、すごくヤバインじゃ…」

靈夢「すつぐやばいわ。メアリー、行くわよ！」

メアリー「え? 私も?」

靈夢「そうよ。もう一度ルーミアに制御符を付けるには一定範囲内にいといてもらわないと術がかけれないの。だから、ルーミアの気を引いといてもらう必要があるのよ。術中は私が動けないし」

メアリー「…分かつたわ。その役割、引き受けようじやないの!」

靈夢「言つといてなんだけど、ルーミアはかなり強いわよ? あの紫と互角に戦うくらいだし」

メアリー「私の役目は『囮』でしょ? 相手の強さなんて技術でどうとでもなるわ。それに: 友に殺されるんなら…本望よ」

靈夢「あんた本当に肝が座つてるわねえ」

そんなことを言いながら二人は魔法の森へと急いだ

数分前

魔法の森

ルーミア「ああ、お腹減ったのだー」

もはや口癖となりつつある言葉を呑きながら、その場しのぎで森の木の実を食べていた

ルーミア「前に来た人間、あいつは美味しそうだったのだー…」過去を振り返つても意味が無いと知りつつも考えてしまう

しかし、神はルーミアを見放してはいなかつたようだ

モブ雄「いたぞ! あそこだ」

モブ助「妖怪狩りだあ!」

モブ衛門「妖怪を退治したら泡銭くらいは貰えるのかねえ」

そんな事を言いながら男が三人近づいてきた

ルーミア「!?お前は…前来た旨そうな人間なのだー！一度ならず二度も私の前に姿を見せるなんて、私はついてるのだー！」

モブ雄「へつ、今回は三人もいるからな！前みてえにはいかねえぜ？」

ルーミア「ふん！人間が数人群れたところでどうとでもなるのだー！」

その直後男が撃った弾により、ルーミアの左脇腹に小さな穴があいたが、すぐに塞がつてしまつた

モブ衛門「チツ、やっぱ体撃つてるだけじゃバケモンには銃は効かねえか」

ルーミア「そんなもの、ちょっと痛いだけでどうつてことないのだー！」

そう言いながら、普段弾幕しか使わぬルーミアには珍しく瞬時に男達との距離を詰めて物理攻撃に出た

ルーミア「これでも、食らうのだー！」

ルーミアが繰り出したのは、メアリーの真似なのだろうか、サマー・ソルトであった

それを咄嗟に、手に持っていた散弾銃でガードした

普通なら壊れてもおかしくない様な威力の蹴りを受けた散弾銃だつたが、流石河童製、かなり丈夫であつた

しかし、ルーミアが蹴った場所が引き金近くだつたこと、偶然銃口がルーミアの側頭部に向いてしまつたことが災いし、暴発弾が数発ルーミアの頭に当たつてしまつた

ダダーン！

ルーミア「がつ！…痛いのだー…」

幾ら妖怪とはいえ、頭は弱点であり、重要部位である

頭が吹き飛んでいないか確認する為に頭に手をやつたルーミアはあることに気がついた

ルーミア「?!リボンが…欠けてるのだー！」

何故リボンが欠けていてはいけないのかはルーミア自身もよく覚えていないが、心の奥底で危険だと何故か理解している

その慌てようを見た男達三人は、そのリボンがこの妖怪の弱点だと思い、ニヤリとした

モブ助「そのリボンがお前の弱点か！」

ルーミア「ち、違うのだー！これは自分でもわからないけど、なくなると危険なのだー！」

モブ雄「その慌てよう、この状況じや逆効果だぜ！やれ！」

その合図をきっかけとしてルーミアのリボン及び顔に大量の銃弾が浴びせられた

そして遂にリボンは跡形もなく吹き飛び、顔も一部が飛散してしまい、糸が切れた人形のようにルーミアは地に臥した

モブ衛門「やつたぜ！大口叩いた割にはチヨロかつたな！」

そんなことを言いながらルーミアに近づいていった

しかし、あと少しでルーミアに触れるという所で他の二人の視界からモブ衛門が消えた

いや、消えたというよりは、闇に呑まれたというべきか

モブ衛門は自分の影から伸びた黒い手に足を掴まれ、影の中に引きずり込まれてしまったのだ

モブ助「な、なんだよ今の！まさか、コイツまだ生きてやがるのか
!?」

そう思い、ルーミアの方を見る二人

すると、ルーミアの周りに闇が集まり始め、ルーミアを包み込んだその後、ルーミアの体が急に成長し、成人ぐらいまで成長したところでルーミアが起き上がった

EXルーミア「ふう…開口一番早速顔が半分ないんだけど、どういう状況なのよ…」

そんなことを言いながら欠損部に闇を集めると、みるみる傷や欠損が治っていく

モブ雄「ようやく本性を表したな化物！」

EXルーミア「あら、早速人間（食糧）はつけーん」

その笑みを見た時、男二人は本能的に勝てないと悟つて逃げようとした

EXルーミア「あら、逃がさないわよ！」

ルーミアは自分の影から黒い手を伸ばし、モブ助の腹を貫き、そのままモブ雄の顔を鷲掴みにした

そして手の中に妖気を溜めて爆裂させると見た目以上の大爆発が起き、モブ雄の顔も消し飛んだ

EXルーミア「ふう…やつぱりまだ体が鈍ってるわね…全然力の加減が分からなーいわ」

ルーミアは普通に魔力弾で人間を弱らせようとただけだつたのだが、加減を間違つてしまつた様だ

EXルーミア「とりあえず、もうおなかペコペコだし、残つてる分だけでも食べちゃおうかな」

そう言つてルーミアは『物』と成り果てた二人を喰らい始めた

EXルーミア「…全然お腹が満たされない…やつぱりこの体は消費が激しすぎるわね」

一瞬人里でも襲おうかとも考えたルーミアであつたが、否と言う結論に辿り着いた

EXルーミア「お腹はすつゞく空いてるけど、――との約束だもの。唯一の友との約束くらい守らなきゃね」

そんな事を呟いていると向こうから誰かやつてきたようだ

靈夢「居たわ！こつちよ！」

メアリー「これが…ルーミア？」

やつてきたのは靈夢とメアリーだつた

To Be Continued

13話 殺人鬼V.S食人鬼

魔法の森

EXルーミア「あら靈夢久しぶりね。最後に会つた時はあんなに小さかつたのに、えらく大きくなつたじやない」

靈夢「あんたを最後に見た時からもう10年はたつてゐるからね。嫌でも成長するわよ」

EXルーミア「で、そつちは…ああ、貴女がメアリーね」

メアリー「ええ、貴女自身には初対面だけどね」

EXルーミア「ところで、私に何か用かしら?」

靈夢「あんたが久方ぶりに現れたから、また暴れるんじやないかと思つて來たのよ」

EXルーミア「まあ、それしかないわよねー。でも、先代とも人里を襲わないつて約束をしてるから、安心して頂戴」

靈夢「そう…ならないのよ。それじゃあ私たちは帰るわね」

そう言つて二人は帰ろうとした

その次の瞬間、ルーミアが出した黒い手が二人に襲いかかり…

メアリー「やつぱり…か」

メアリーのナイフによつて切り落とされた

EXルーミア「あら、バレちゃつたみたいね」

靈夢「そりやあんなに殺氣だつてたら誰だつて気づくわよ」

EXルーミア「でも、ここは人里じゃない。だから約束には触れてない。そうよね?」

靈夢「はあ…そうね。約束に触れた行動はしてないわね。でも、やつぱりあんたを再封印させてもらうわ!」

そう言つて靈夢は森の上空に飛んで行つた

EXルーミア「という事は、メアリー、貴女が私の相手をしてくれるのかしら?」

メアリー「ええ、私が貴女の足止め役よ」

EXルーミア「なかなかにナメられたものね。かつて紫に並ぶ大妖怪とまで言われた私の相手が何の能力もないただの小娘とは…笑わ

せる！」

メアリー「ええ、全力を出せる貴女なら、私なんか一瞬で消しとばせるでしょうね」

なぜかメアリーは含みのある笑みを浮かべた

メアリー「でも貴女は今、まだ本気は出せない。しかもそつちには靈夢の封印までの制限時間というハンデもある。それならまだ私も勝機はあるんじやないかしら？」

EXルーミア「フツ、そんなものハンデの内に入らないわ！」

ルーミアは余裕の表情をしていたが、メアリーにはわかつた。ルーミアは今少なからず見栄を張っていると

メアリー「（それなりにはハンデになつてているようね‥でも、今のルーミアの妖気は人間である私でもわかるくらい強大な物だし、まったく油断できないわね）」

その後、少しのにらみ合いが続いたが、すぐに動きがあつた先に動いたのはルーミアの方だつた

EXルーミア「召喚『闇に蠢く黒い手』」

ルーミアがスペカを唱えるとルーミアの影から2本の黒い手が出てきて、メアリーを襲つた

メアリー「その程度、避けられないとでも思つてるの？」

そう言つて襲つてきた二本の手を空中で切り落とし、着地した

EXルーミア「へえ、なかなかいい動きするじやない。でも、無尽蔵に湧いてくる闇に対して、いつまで耐えられるかしらね？」

メアリー「あら、それはどうかしらね？」

EXルーミア「？…どういう事かしら？…！」

そこでルーミアはあることに気が付いた

EXルーミア「腕が…再生できない！」

メアリー「やっぱり、貴女も妖怪なら、靈夢の靈力には敵わないのね」

EXルーミア「くつ…なら術を解除するしかないわね」

そういうと、ルーミアから伸びている二本の手が消えた

メアリー「さあ、これで振り出しに戻つたわね」

EXルーミア「(この子、あからさまに時間稼ぎをしてるわね…早くしないと靈夢の術式が完成しちゃうわね)」

そう考えたルーミアは次のスペ力を取り出した

EXルーミア「蝕符『闇夜に潜む殺人鬼』」

すると、今度はルーミアを中心としてあたりが真っ暗になり、何も見えなくなつた

メアリー「(流石に、前と同じで自分も見えてないっていうのは期待出来ないわよね)」

そんなことを考えながら、周りに現れた殺氣を消していくた
すると、しばらくしてメアリーを包んでいた暗闇が晴れた

EXルーミア「ほんと貴女には目潰しは全く聞かないわね」

メアリー「あら、分かりきつてる事じやないの」

EXルーミア「そうね…じゃあ、直接殺させてもらうわ！」

そう言つてメアリーに一直線に突つ込んできた

だが、本気を出せないルーミアの突進などメアリーに見えない訳が
無く、簡単に避けられてしまう

メアリー「そんな馬鹿正直な突進当たるわけ…!?

そう言い切る前に、とあることに気が付きメアリーは咄嗟に回避行動をとつた

なんと、ルーミアは突進している自分の体に隠して闇の手を背中から
ら出していたのだ

そのことに気が付くのが一瞬遅れたメアリーに闇の手が掠つた
だが、その掠つただけでも人間であるメアリーには大怪我を作るの
には十分であつた

メアリー「へえ…なかなか考えた攻撃方法ね」

斬られた腹を押さえながらメアリーがそう言つた

EXルーミア「ようやく貴女に攻撃を当てることができたわね。こ
れでさつきまでみたいには動けないわよ」

メアリー「そうね…だから、こうさせてもらうわ！」

そう言つてメアリーがナイフを投げた

そのナイフはルーミアの左翼に刺さつた

EXルーミア「あら、幾ら退魔の効果があるからって、その程度の物じや私はやられないわよ?」

メアリー「でしようね。だつてそれが目的じや無いもの」

EXルーミア「は?それつてどういう…」

ルーミアはメアリーが何を言つているのかさっぱりわからなかつたが、すぐに異変に気が付いた

メアリーの投げたナイフはルーミアの左翼を貫通し、後ろにあつた木にルーミアを繋ぎ止めていたのだ

しかもこの魔法の森にある木のほとんどは森の中に充满している魔力が染みついていて、退魔の効果が木や土にも働くのだ

今のルーミアであればナイフを木ごと引き抜くことも、おそらくは可能であろうが、そんなことをしている間にほぼ間違いなくメアリーに次のナイフを刺され、拘束がきつくなることは目に見えていた

EXルーミア「(これは…詰んだかしらね…)

メアリー「(ルーミアがおとなしくなった?…今なら、あれが出来るかしら?)」

ふとある事を思い出したメアリーはルーミアに近付いて行つた
そしてあと數十センチで手が届くという所で…

EXルーミア「私に…触るなあああ!」

ルーミアの出した闇の手に腹を貫かれ、風穴を開けられてしまつた

To Be Continued

最終話 友に遺す物

メアリー「ガツ…ハツ!? まだ、そんな…力が…?」

EXルーミア「ハア…ハア…ハア…油断…したわね! 私の…勝ちよ！」

靈夢の術式が完成するまでまだ数分はかかる。そのことを確認したルーミアは勝利を確信した

メアリー「まだ…よ！」

EXルーミア「え? 何か言つたかしら?」

メアリー「まだ…終わつて…ない!」

そう叫んだかと思うと、メアリーが突然起き上がり、いつの間にか手に握り締めていたものをルーミアの頭に叩きつけた

EXルーミア「痛つ!…つて、これは…封印符!? 何で貴女がこれを持つてるのよ!？」

メアリーがルーミアに叩きつけたのは、靈夢から貰っていたルーミア用の封印符だった

靈夢が神社からここへ来るときに「もし可能なら」という事でメアリーに渡していたのだ

EXルーミア「ぐつ!…力が…抜ける!」

そう言いながらルーミアは倒れ込み、どんどん体が縮み見慣れた幼女の姿になつた

ルーミア「うう…何があつたのだー?」

ちょっととしてからルーミアが起き上がり、辺りを見回した

ルーミア「…!? メアリー何があつたのだー!? その大怪我、まさか私が?…」

メアリー「ええ…そうね。すつごく強かつたわ」

ルーミア「ち、違うのだー! あれは私の様で、私じゃないのだー!」

メアリー「貴女さつき…まさか私が?つて…自分で言つたじやない

⋮

ルーミア「そ、それは…」

そうルーミアが口籠つていると、靈夢が降りてきた

靈夢「メアリー！無事かしら？」

メアリー「見ての通り…相討ちよ」

ルーミア「靈夢！早くメアリーを永遠亭に運んで欲しいのだー！」

靈夢「…もう、手遅れよ。素人目にも出血が多すぎるし、何よりそのお腹の穴はどう見たって助かりようがないわ。今生きてるのも驚きなくらいね」

ルーミア「そ、そんな…」

メアリー「ね、ねえ…ルーミア」

ルーミア「どうしたのだー!?何か言いたいことがあるのかー?」

メアリー「一つ…私のお願ひ…聞いてくれない?」

ルーミア「な、なんなのだー?」

メアリー「私を…食べてくれない?」

ルーミア「!…何を言つてるのだー!今はそんな冗談聞きたくないのだー!」

メアリー「冗談では…ないわ…貴女…約束したじやない…私に勝つたら私を食べる…つて」

ルーミア「あれは食べても、いい、つて言う約束なのだー!食べるかどうかは私の勝手なのだー!」

メアリー「よく…覚えてるわね…でも、私の技術を…貴女以外には…あげたくないのよ」

靈夢「最後ぐらいのこと聞いてあげれば？そんな哀れな罪人でも一人の人間よ」

メアリー「靈夢は…手厳しいなあ…」

靈夢「ふん、どうとでも言いなさい。それじゃ、私はもう帰るわ。

ルーミアも元に戻ったんだし」

そう言つて靈夢は帰つていった

メアリー「私の最後の我儘…聞いてくれるかしら？」

ルーミア「…私はこの森の妖怪、そしてお前は私にやられた一人の人間。それでいいのかー?」

メアリー「ええ…実力があるわけでもないのに…功績目当てで妖怪退治をして…返り討ちにあつた馬鹿な人間よ」

ルーミア「…つたく…手間かけさせ…グスツやがつたのだー…ようやく…グスツ餌にありつけたのだー…」

そう言いながらルーミアはメアリーに近付いていき、ルーミアの闇がメアリーを包んだ

そしてしばらくの間、闇の中からは何かを咀嚼したり噛み碎く音が森に響いていた

数日後

博麗神社

靈夢「ハア…今日も誰も来ない…」

ルーミア「靈夢ー、遊びに来たよー」

靈夢「あらルーミアじやないの。いらつしやい」

その時、靈夢はルーミアから流れてる妖氣から自分が帰った後の事を察した

靈夢「…メアリーの望みどおりにしてあげたのね」

ルーミア「うん。メアリーがそれを望んでたしね」

靈夢「ところで、いつもの『のだー』口調はどうしたのかしら?」

ルーミア「ああ、メアリーを食べた影響なのか、自然と消えたみたいのよ」

靈夢「へえ、そう言うもんなの?」

ルーミア「普通はそんな事ないんだけど、私は同じ位の歳の妖怪に比べて人間を食べれないから、一人あたりの人間からの影響が大きいのよ」

靈夢「闇の量?」
ルーミア「私の場合、食べる者の闇の深さや大きさを取り込んで生の量には驚いたよ」

靈夢「闇の量?」
ルーミア「私の場合、食べる者の闇の深さや大きさを取り込んで生命エネルギーにしてるからね。知識は肉を食べなきや手に入らないけど」

靈夢「つまり、メアリーは闇が深かったと?」
ルーミア「うん。当分何も食べなくても大丈夫なくらいの闇だつた

わ。流石に先代ほどではなかつたけどね」

靈夢「え？ 先代？ 何であなたが先代のこと知つてゐるのよ」

ルーミア「ああ、この封印が不完全だつたのか、昔の私の記憶が一部だけ残つてるのよ」

靈夢「…改めてちゃんと封印した方がいいかしら」

ルーミア「だ、大丈夫だつて！ ちゃんと約束は守るし、私の妖氣で

靈夢には勝てないのは目に見えてるでしょ？」

靈夢「あら、えらく謙虚になつたものね…それもメアリーの影響かしら？」

ルーミア「んー、そうかもね。メアリーを食べた事で一部だけどメアリーの思想も知ることができたの？」

靈夢「へえ、どんな思想を持つてたの？」

ルーミア「『幸せとは、相対的な物である。最初の内は小さな幸せで満足していられるが、次第にその幸せは『日常』になつてしまい、その幸せでは満足できなくなり、今度はそれ以上の幸せを求めてしまう。そして、ある時気が付くのだ。自分の周りに誰も居なくなつていることに。だから、まだ私に近付いて来てくれる人が居たら幸せを追い求めすぎると身を滅ぼすとその人に言おうと思う。これ以上、私みたいな惨めな人間は現れてほしくないから』こんな内容だつたわ」

靈夢「へえ、あのメアリーがそんな事を思つていたのね」

ルーミア「私もその考えには共感するところがあるし、私自身、高望みし過ぎて失敗したことも多々あるから見直さないといけないと思うしね」

靈夢「そう…その思想、貫けるといいわね」

ルーミア「うん。貫いてみせるわ」

靈夢「それ以外には何かメアリーから得られた物はあるの？」

ルーミア「うーん、あと得られたものつて言つたら、ナイフ攻撃、気配の消し方と探し方、CQCとかかな？」

靈夢「CQCつて言うのはわからないけど、結構いろんなことをメアリーから得られたのね」

ルーミア「一応私とメアリーの能力を合わせたスペカで、闇討『常

闇の殺人鬼』つていうのも作ってみたよ」

靈夢「へえ、メアリーとあなたの能力の合わせ技ね…なかなか強そ
うじゃないの」

ルーミア「私はまだ弱い妖怪だけど、メアリーと一緒にと思えば頑
張れる気がするわ。それじゃ、私はそろそろ帰るね」

そう言つてルーミアは魔法の森に帰つていった

靈夢「ええ、またいらつしやい」

その後、少しの間鳥居の方を見ていた靈夢であつたが、急に振り向
き、虚空に向かつて話し始めた

靈夢「…紫、居るんでしょう？」

紫「はいはい、居ますよー」

靈夢「あんたが連れてきた殺人鬼、最期は人間らしく死ねたみたい
よ？」

紫「ええ、そうね。正直私も驚きだわ」

靈夢「人間は変わることで成長し、過ちを正していく生き物よ。あ
んたら妖怪が思つてるより強いのよ」

紫「それはそれは、お見逸れ致しました」

靈夢「メアリーは、人里では大量虐殺の大罪人として記憶されるこ
とになるでしようけど、私達やルーミアの中では身を挺して幻想郷を
救つた者として記憶されるわ」

メアリー・フォード：殺人鬼異変の主犯者、ルーミア暴走時、身を
挺してルーミアの再封印をし、ルーミアと相討ちになる。本人の希望
によりルーミアの中に眠る

The End